

調査同行の記

石井 研 士

(昭和57年修士修了)

私の初めての調査は、柳川先生に連れていってもらった真如苑だった。学部の4年の時である。当時学部のゼミでは新宗教の問題を扱っていた。その一環としての実習であった。真如苑とはそれ以来の付合である。もう8年になる。秋も深まった頃、6人ほどで出掛けたと思う。午後の2時頃、立川にある真如苑の本部を訪れ、質問に質問を重ね、真如苑を出たのは10時を過ぎていた。それでも、中野駅で下車し、ヤポネシア共和国でお酒を飲み、終電ぎりぎりにフラフラしながら家へ帰った。お酒を飲みながら先生に、「教祖って、ぜったい変ですね。」といった覚えがある。先生は「そうですね。」と笑っておられた。これが先生

に連れていっていただいた最初の調査である。

二度目は、いきなり海外調査であった。1977年から日系人の宗教調査が始まり、その第2回目の調査に参加することになった。私は喜び勇んでハワイへ向かった。資格はボランティアで、正式の調査メンバーというわけではなかったが、一応一人前に調査はすることになっていた。私の調査教団は真如苑と世界救世教ということになっていた。特に私は真如苑に強い関心を抱いており、ハワイに到着してすぐにもコンタクトを持ちたかったが、都合折悪しく、調査はままたらなかつた。「調査はあせってはだめですね。機会を待ちましょう。」そういわれた先生の言葉通り、その後真如苑の方

々のお許しを得て、なんとか調査を終えることができた。私が調査のモノグラフを書いたのはこれが始めてである。

二年後に、同じ日系人の宗教調査を目的として、カルフォルニアへと足を伸ばすことになるが、渡米するすこし前、新学期が始まってまもない頃、村の宗教調査の実習として、山梨県北都留郡丹波山村に、紹介者の中沢新一さんにともなわれてでかけた。1泊2日の小旅行であったが、これを機会に、丹波山の調査は現在まで柳川ゼミで続けられている。夏休みに入って、渡米。1ヶ月半の調査である。初めの1ヶ月はロスアンジェルススのダウンタウンに、静大の真田さんと安いモーテルに泊まった。先生はベニス・ビーチにあるグリーン・ビレッジというアパートに、井上さんや大正大の星野さんと起居をともにされていた。その日の調査が終わって、用事で、あるいは遊びにアパートへ行くと、きまって酒盛が始まるが、そうすると「石井君、そろそろあれを。」先生ご持参のテープがかかる。いろいろな歌が入っていた。「雨の御堂筋」「北の宿」「黄色いシャツ」そしてきわめつけの「タイガース音頭」。「勝てぬ巨人に男の情、かけてやりたい勝たせてみたい。そいつができない野球の定め、おれのおれのおれの背中で牙むく虎の今日のえじきはどこの誰。勝った勝った勝った勝った阪神阪神タイガース。」私はほぼ毎晩のように聞かされ、すっかりこのえげつない歌のファンになってしまった。

この話には後日談がある。先生の大学院時代の同期に、中部カルフォルニアのオックスナードで浄土真宗の開教師をされている藤谷さんがおられる。先生は盆行事の調査のために当地を訪れた。藤谷さんの奥さんがカラオケにこっていて、先生

の持参したテープは大好評を得て、ダビングにつぐダビングを繰り返し、オックスナードの町に毎夜タイガース音頭が流れたと聞く。

ロスアンジェルススの1ヶ月の調査を終えて、私は先生についてサンフランシスコの郊外にあるパークレーのボーディング・ハウスにとまっていた。U.C.パークレーのロバート・ベラー教授をまじえた研究会なども行ったが、おおかたここでは調査というよりも本の買いつけやチベット仏教の見学に時間を裂いていた。帰国する前日、お土産を買いに、フィッシャーマンズ・ウォーフへ先生と二人ででかけた。車を駆ってゴールデンゲート・ブリッジを渡り、山あいの道を昇って、ゴールデンゲート・ブリッジと市街を眼下に収め、ギラルデリで買物をした。おもちゃがあった。土産になるものはないかと見ていると、ビンゴ・ゲームが置いてある。調査でお寺に行った時に、しばしばビンゴ・ゲームをやっているのを見た。会員の親睦と寺の財政上の理由からだろうか。先生が隣で、「ビンゴですね。」とおっしゃる。「量ばりそうですね。」とわたし。「しかし、なかなか面白かったですね。」と先生。「忘年会でも使ってみましょうか。」ということでわたしはサンフランシスコから量ばるビンゴを買ってきた。

帰ってからはもっぱら丹波山の調査にご一緒させていただいた。昼間、班ごとに分かれたり、個別に調査を行ない、夜ミーティングをするのが常である。ミーティングが終わると、酒盛である。酔うと先生の歌がでる。「これは80年代の絶唱ですね。」そうおっしゃって、中島みゆきの「ひとり上手」を、先生流の歌われ方で歌われる。

また調査に連れて行ってほしい。